



独立行政法人 国立病院機構

四国こどもとおとなの医療センター

アートプロジェクト

—今月のショット—

手術エリアの待ち合い室に描かれた壁画。日の出前の空にミカン畑とオリーブ畑。天井には讃岐富士。香川県になじみの深い風景です。東京在住の島田玲子(画家・イラストレーター)さんの作品です。島田さんは普通寺生まれ。故郷を愛する気持ちが、柔らかく風通しの良い空間を生み出してくれました。



2014年 4月号

—院内の小さな声から—

Sちゃんの部屋はいつも洗濯物のいい香りがします。おすすめの絵画数枚を乗せたカートを押しながら、ドアをノックすると洗濯と生野菜と本の大好きなお母さんが、いたずらっぽい笑顔で迎えてくれます。病室の絵画の掛け替えは私の大切な仕事の一つです。Sちゃんの部屋はホスピタルプレイスペシャリストの福田さんと一緒に訪問します。普段はiPadで300枚の絵画の写真から好きな絵画を選んでいただくのですが、Sちゃんの部屋にはあらかじめセレクトしておいた実物を持って行きます。Sちゃんの好きな色はブルー。ベッドサイドから絵画を見せると、気に入ったときには目を大きく開いてうなづくように目をゆっくり閉じてくれます。気に入らないときはそのまま。この反応も、お母さんと一緒に話しかけているうちに少しずつわかるようになりました。先日は「カブ」の絵から大根の話になりオリーブオイルの話、ようかんとういろうの話になって・・・Sちゃんを取り囲んだまま、お母さんと福田さんとわいわい騒ぎました。Sちゃんの方を見たら目が合って、大きな瞳をゆっくりとうなづくように閉じてくれました。部屋を出るときにお母さんが「あー久しぶりに大笑いした。楽しかったあ。」と、笑ってくれました。福田さんと「よかったね。」と話した後、「手術室までの天井にところどころ壁画があるといいね」と、話しました。素敵なアイデアはいつもゆたかな時間の後に降りてきます。

手術室の窓プロジェクト

東京在住の画家、島田玲子さんからお便りが届いたのは昨年9月。クウネルという雑誌で紹介されていた当院の記事を読んで、病院でのアートプロジェクトに共感して下さったとのこと。「普通寺は私の生まれた場所です。何かお手伝いできることはありませんか。」と、作品のコピーを同封してくださいました。そこにはざわめく命の循環があり、細部には自然を慈しむ気持ちがにじんでいました。島田さんなら、きっと自然のエネルギーを病院に届けてくれる。開院前からあたためていた手術室の壁画のプロジェクトがゆっくりと動き始めました。旧香川小児病院では手術室にたくさんのアンパンマンの絵が飾られていました。その絵は不安な子ども達の心に勇気と希望を与えてくれました。新病院でもアンパンマンに代わる何かを。というのが、現場の医療スタッフの切実な願いでした。では、何を描くのか。その答えはなかなか見えてきませんでした。ある時、手術室の看護師さんと話していて「閉鎖的な場所だから息苦しくなってしまう・・・」という声が聴こえてきました。閉鎖的なのは場所だけではないのかもしれない。患者さんも、スタッフも、不安や緊張に襲われると、つつい周りが見えなくなってしまう。そんな時、ふと、窓から風が吹き込んで来たら。手術室の窓プロジェクトはそんな風にスタートしました。窓からどんな景色が見えたらリラックスしてもらえるだろうか。スタッフの皆さんの意見を参考に、島田さんが心を込めて描いたのは、使い込まれた木製の窓枠。愛する香川の風景。ミカンとオリーブの妖精。ミカンの実はたくさんの医療スタッフとボランティアの方々によって描かれました。これから手術を受ける全ての人にこの想いが届きますように。

今月の一枚

作家:坪谷 令子 「かくれんぼするものよっといで〜このゆびとまれ〜」



種や実は「いのち」・・・みんな丸いんだけど、よく見ると、全く同じかたちのものはないのですね。そんな「いのち」は巡ります。目に見えない「いのち」に囲まれているのです、たくさんの・・・。